

**1. 活動報告(事務局 記)**

8月5日(日) 合鴨に替わってたんぼのコナギ、他草取りに全力を集中しました。

来る18日の観察隊行事須賀河内川の登流障害物除去、通路の確保

以上21名の参加を得まして完全にやり遂げました。又たんぼは本日より中干に入ります。

したがって合鴨はカルガモ小屋に移動、カルガモは蓮田に新しく浮島を作って住む様にしました。この日合鴨1羽空から?天敵に襲われ残り3羽となりました。

8月9日(木)野生のカルガモとなって本日3羽目が飛び立ちました。といえは格好いいですが、7日に2羽がいなくなり、本日 早朝には3羽目がいなくなりました。

付近には害獣から襲われた形跡、羽毛の乱れ散ったものも確認できませんでしたので旅立ったのではと良い方に解釈します。蓮田に屋根つきの浮島が帰りを待つ様に静かに餌を残し浮いています。(8月11日3羽、8月12日、14日1羽帰巢してまた飛び立ちました)

5月29日に孵化し70日間楽しませていただきました。暇な折は戻ってきて我々を安心させ、楽しませてくれたらと願わずにはられません。

8月18日(土)午前、

蕎麦田の耕作準備、たんぼの畦草刈り 15名の参加でした。

8月18日(土)午後は、

午後の里山自然観察隊は川の探検でした。2班に分かれて、須賀河内川の川登り班とビオトープそばの川での観察班で行いました。隊員18名、保護者14名、サポートは会員10名と山大生応援5名が参加しました。

8月18日(土)

夕方から厚東川夜の水棲動物観察、魚獲、ビオトープでキャンプを行いました。

子ども7名 保護者6名、会員サポーター8名

はえ縄 9はり、ウナギ籠3個を夕方取り付けましたが、全くわなにはまった魚類はいませんでした。昔は10年前~20前には考えられない事でした。夜掘りはカワムツ、ウナギ、ナマズ、カマツカ、おたまじゃくし等観察できましたが、まだ時間が早かったせいか魚類が熟睡しておらず、捕獲する事は困難でした。

**2. 今後の予定(事務局 記)**

見学者 現在の所申し込みはありません

行事

8月25日(土)特別活動日 蕎麦の種まき(20日草焼、22日耕運)

9月 2日(日)(第一日曜日)保全活動(エコアップ、草刈りなど)

9月15日(土)(第三土曜日)保全活動(エコアップ、草刈りなど)、

午後 里山自然観察隊(カエル捕獲作戦)

**3. 来訪者の声 (東屋のノートより一部抜粋)**

- 7月 1日 僕達は千葉から来た兄弟です。チョウトンボをみました。とても珍しいトンボです。

8月17日 まえきたときよりメダカがいるようナキガシタ。カモもいてかわいいと思った。

まえと違ってカモやメダカがいるようなきがした。カモのはねがきれいで、かわいいとおもいました。

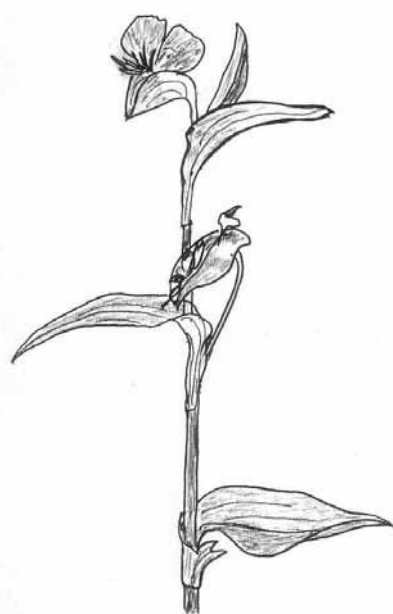
カモが皆仲良くて、すごくかわいかったです。お米もすごく緑がきれいでした。

#### 4. ピオトープ関連（ピオトープ周辺の植物） 美濃和 信孝 ツククサとイボクサ

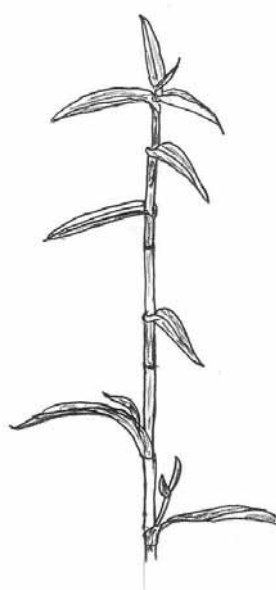
ツククサ科の草花を二つご紹介します。

ツククサは、日本、東アジア原産の日当たりのよいやや湿った場所を好む1年草です。夏の早朝、露に濡れながら花を咲かせるので露草、あるいは花弁の青い色が「着」きやすいことから「着き草」と呼ばれていたものが転じてツククサになったという説があります。万葉集などの和歌集では「月草」の表記が多いようです。この花の青い色素はアントシアン系の色素ですが、着いても容易に退色するという性質を利用して、染物の下絵を描くための絵の具として用いられました。青い印象的な花びらは2枚に見えますが、実は3枚で、下の1枚は白く小さくて目立ちません。ツククサの花は朝咲いて、午後にはしぼんでしまう一日花です。しかしいつも花が咲いているように見えるのは、貝殻状の総苞の中に2個から4個のつぼみがあり、それが数日おきに順番に開花していくからです。今度機会があったらぜひツククサの総苞を開いて中を観察していただきたいのですが、総苞の中には2本の花序の柄があり、上の柄には一つ、下の柄は渦巻状に三つ前後のつぼみ、あるいは花が終わった場合は果実が入っています。それが順次、上の柄のつぼみ、次に下の柄の外側のつぼみというふうに順番に咲いていくわけです。自家受粉で実を結ぶので、すべての花が果実を付け、種子の数は相当なものになるはずですが、1年草としての宿命かもしれません。特に水辺に生育するということはなく、人家の周りにも普通にある植物ですが、ピオトープではミゾソバなどに混じって水に浸かった状態でも生育しています。

同じツククサ科でもイボクサは、完全に水に浸かった状態でも真価を発揮できる1年草です。どうもよく見ていると、最初から水中に出現するのではなく、畦などの水際で生えたものが水の中に入っていき感じます。枝分かれしながら横に這い、節から根を出して増えていきます。そうやって覆い尽くすので、水田では強害草として嫌われています。完全に水没したり、水から出たりという水位変動にはめっぽう強く、それが水田という環境に適応したため水田の雑草になった、とも考えられます。この草も、ツククサと同じように一日花で、秋になると葉腋から直径1.5cmくらいの淡紅色の花を咲かせます。花のつくりはいかにも単子葉植物らしく、花弁、がくともに3枚の点対称です。この花の花びらはたいへんにみずみずしくまた脆く、水田雑草の中では一番可憐な花といえるでしょう。



ツククサ（ツククサ科）



イボクサ（ツククサ科）

## 5. 会員の声

### 芦はアシかヨシか (林 弘之)

ビオトープに接する須賀河内川は、ほとんどの場所に芦が茂っている。毎年中電社員研修で芦刈作業を実施されているので群生の感はあまりないが、市道の下流や昭和山入口辺りは正に群生で、水面は見えず他の植物の生える余地はほとんどない。

芦は昆虫や魚類の生息や水質の浄化に良いと言われ、琵琶湖の芦は有名である。先日水質浄化のために、霞ヶ浦に芦とアサザを植えるとの放送を聞いた。芦の繁殖力は抜群なものがある。その方法は次の通り。

地下茎が横に伸び芽を出す。(範囲は広くない)

何本か一株から1本のランナーが出る。7月中旬1本のランナーを調べると、長さ6m30cmで節の数は45節で、41の節から新芽や根が出ていた。最終的には何mで何節かわからないが、50株か60株の発生も考えられる。(範囲が広がる)

新芽が出て若い茎は別だが、充実した茎なら刈り取っても水分があれば節々から目を出す。したがって刈り取った茎は川に流さない。流すと下流のどこかにひっかかり、そこで新芽を出す。(突然の発生)

花が咲くので実生の芦が生える。(確認して無いので推測)

さて名前は忘れたが「人間は考える芦」といった人がいる。私は真実は知らないが、この繁殖力を言うのであろうか？。今や人間は地球の裏側からも生きる為の物質を調達したり、中国の一人っ子政策にしても、日本の少子化対策にしても、自然淘汰を避ける策だろう。宇宙ステーションを作る時代だから、近い将来月が衛星都市となり、ふるさと納税を地球に送る時代が来るかも。“人間は考える芦だから”

ところで、私は以前ビオトープの少し下流になる川の中に、巾1m位の川を掘った事がある。それは茂る芦のためにゴミや土砂がたまり、段々と川底が高くなり大雨のとき氾濫するのを止める為。スコップで掘ると意外と掘り易かった。それは川砂と芦の茎や根に草木の堆積を、雨後のやや増水している時掘っては流す作業だったから。その時気付いたのは地層が出来ている事だった。芦が群生しているために増水毎に草木や砂がたまり、白や茶や黒色の層を形成していた。芦の茎も翌年の新芽は堆積した上から出て、そこに新しい根を出すので2重根、3重根・・・が見られ、遠くに行かなくてもちょっとした地層の勉強になると思う。木の場合は二重根になると良くないと聞いているが、芦は何重根であろうとも生きている。この場所はその後の増水毎に流され、完全に昔の川底を保っている。(芦が生えると抜いてきたから)ビオトープに接する下流部分は、以前護岸工事の時業者に川底を掘ってもらい、ダンプで他の場所に運んだが現在はかなり川底がたかくなっている。以上のように、芦は川にとって悪い存在で川の土手は壊すし、洪水で田畑を荒らす基にもなる。

辞書によるとアシの漢字は蘆と芦、ヨシは葦・葭と芦があり、アシは「悪し」に通じる為これを避け、「善し」ちなんで言うアシの別称とある。ヨシ、アシと両方読む漢字は芦だけである。よく見ると草カンムリに戸と書いてある。思うに、芦が群生して川に戸板を立てて流れを悪くし災害をもたらすからこの字になり、昔はアシと読むのが正解だったと思う。(辞書によると)真締川の中流は見事(?)な芦の群生である、現在上流にダムが出来たので水量調節も出来るようだが、私にとってはアシと言いたい。湖と川に生える芦。皆さんはヨシ派？アシ派？答えはドッチ？

「猛暑にて エビもやれんか 橋の下」 弘之

## 6. 里山自然観察隊（8月18日、隊員20名、保護者10名、会員12名）

### 川の探険

川の探険は、須賀河内川の川登り班とピオトープそばの川での観察班の2グループにて行いました。川登り班は子ども6人に大人5人がつき、タモアミ、投網による魚採取や滝登りを楽しみました。下流部は昨年よりヨシが茂り、淵が深くなるなど、また違った雰囲気でした。今回は全員無事ゴールに到着し、帰り道には父滝の滝つぼで暫時水浴を楽しみました。観察班は主に須賀河内川の下流で、網や投網を使って水棲生物を捕まえました。捕れた生物は、カワムツ、オヤニラミ、メダカ、ギンブナ、カマツカ、ドンコ、スジエビ、ヌマエビ、サワガニ、シマドジョウ、モクズガニ、カワニナ、マルタニシ、タイコウチ、ミズカマキリ、アメンボ、ヤゴ（オニヤンマ、コオニヤンマ、ギンヤンマ、サナエの仲間）、オタマジャクシ（ウシガエル）でした。大物賞は13cmのカマツカ、多くの種類では8種類を捕った子どもがいました。

（関根 雅彦・西原 一誠 記）

## 7. 会よりの連絡事項（事務局より）

- 1) 古代蓮の花を楽しみにしていましたが、やはり芽を出してくれませんでした。いろいろ問い合わせして2年先には健康福祉センターの弘中さんが手配して養育したものを頂く事になっています。その他、東岐波の西村 章さんがピオトープ散策の折事情を知っていただき、来春ハス根と種をご心配頂く事になりました。

古代蓮植栽池は現在「くわい」が密生していますので、年末正月用に収穫しその後植栽池の整備をして植えつける予定です。

## 8. 編集後記

今、各箇所でもカブトムシやクワガタ等の昆虫展を開催している。外国の大型で色も綺麗な虫は子ども達を引きつけており、見る目の輝きも違う。このような昆虫を買って飼育していても、飼えなくなると近くに逃がしてしまい、在来の昆虫達と生存競争を起こしている例も報告されている。そのため、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」が制定され、特定外来生物として、オオクチバス、ブルーギル、アライグマ等が指定された。ペットの野生化では、ピラニア、グッピー、ワニガメ等も報告されている。飼うからには最後まで責任を持って欲しいのだが、飼う人の判断だけで、可哀想だからと、自然に還すのだと、自分勝手なことばかり言って放す人が多い。また、動物愛護管理法が改正され、特定動物（危険な動物）による危害の発生や逸走の防止等を徹底するために、飼育保管についての規制が変わった。650種（哺乳類・鳥類・爬虫類）が選定されリストが公表されている。多くの猿・犬・猫・熊・鷹・トカゲ・鱈などがリストに記載されている。どんどん法制化しないと、環境への対応が遅れていることは、本当に嘆かわしいことである。

一方、植物の外来生物としては、園芸植物がある。これも見た目が綺麗だという理由で、多くの植物が輸入されている。花を終えた植物は、花壇の外に放棄され、また花の後の種は風に飛ばされて、近くの野原に行きやがて芽を出す。野性の中に目立つ花があれば、園芸種と違ってまず間違いないほど多くの花が目につく。これも考えさせられる問題でもある。

（西原 一誠 記）